

実験病理学研究室での集合写真(筆者、写真前列左から一番目)

#5

医療科卒業生リレーエッセイ



## プロフィール: 沖田 結花里 (2008年卒)

愛媛県松山南高校卒業後、筑波大学医学専門学群 看護・医療科学類 医療科学専攻(現医科学類)の2期生として入学。その後筑波大学人間総合科学研究科フロンティア医科学専攻、生命システム医学専攻を修了し、2014年に博士号を取得。博士研究員を経て、2017年より筑波大学 医学医療系 助教として筑波大学に勤務。実験病理学研究室でがんの研究をしている。大変だけれど、それなりに充実している日々感謝の気持ちが増えるようになったのは、最近のこと。

## 研究者として、教育者として、私にできることは何か

筑波大学

医学医療系 助教

沖田 結花里

私は、高校まで愛媛県の田舎で育ちました。愛媛県からさらには四国から脱出するために筑波大学を受験したといっても過言ではありません(笑)。家族と折り合いが悪いかそういったことではなかったのですが、どうしても四国から出たくて、遠くの大学に行きたいとずっと思っていました。理系の職に就きたいと思い、理系を選択したものの、理科科目が得意ではなかったこともあり、医療系の学部を目指そうと考え、当時ちょうど4年制になり始めた保健学科の存在を知りました。筑波大学で保健学科に相当するのが医療科学類ですが、医療科学という聞き慣れないけれど、かっこよく聞こえるこの名前、不思議と興味が沸きました。研究者に憧れていた私には、臨床検査技師を育成するだけではない、とはっきりと書かれていたところにも惹

かれたように記憶しています。無事合格し、念願かなって一人暮らしを始めた訳ですが、たまに寂しくなることもありましたが、私の実家は瀬戸内海に面しており、太陽は海に沈みます。小さな頃に太陽が沈む海がある方角が西と覚えた私は、海が見えないつくばで、どちらが東か西か瞬時に分からないことがあり、そんな時にふと寂しさを覚えたことを懐かしく思い出します。筑波大学にやって来て、早いもので15年目を迎えます。自分が母校で教鞭をとる日が来るとは夢にも思いませんでした。

医療科学類に入学してくる人の多くは、医学部進学を一度は考えたことがあるのではないのでしょうか。私も医療系を目指そうと考えたとき、はじめに思い付いたのが医師という職業でした。そんな折新聞で、医師として目の前の患者を救うことだけでなく、もっと多くの患者を救うために、医学研究があるというような内容の記事を読み、感銘を

受けたことが、研究者という職業を意識するきっかけになりました。入学試験の面接でも研究者を目指したいと言ったことを覚えていますが、とは言っても実際に入学してからはたくさんある授業やサークル活動をこなしつつ、だらけた日々が過ぎていくだけで、研究してみたいという気持ちを思い出すことさえありませんでした。



日経産業新聞に掲載された筆者の研究成果

しかし、卒業研究が始まってからは、生活ががらりと変わりました。何にも全く分からない状態から、色々なことを教えてもらい、失敗しながらも、少しずつできることが増えていくことに大きな喜びを感じました。それは今でも変わっていません。大学を卒業後は、修士に進学し、研究を続けました。その当時は修士1年生の冬には就活を始めなければならず、修士に進学するかどうかは、思ったよりも早い時期に決断しなければなりません。周りが就職活動を始めたことへの焦りを感じながらも、なぜかやろうという気にはどうしてもなれませんでした。研究(と呼べるレベルではないけれど)を始めてたった二年で、何が分かったというのか、これで終わりにするのは勿体ないと思い、博士への進学を決意しました。学生を続けることへの後ろめたさみたいなものを感じると同時に、研究者としてやっていけるのかという漠然とした不安がすごく大きかったのを覚えています。

博士に進学した後は、周りが同じ様な人ばかりになるので、意外とくつろげました(笑)。今思うと、実験だけに集中できたのはあの頃だけだったのではないかと思います。一通りの実験はできるようになり、自分で少しずつ考えられるようになってくることで、実験がますます好きになりました。後輩と一緒に論文を読んで、新しい実験を試したりと、充実した時間を研究室で過ごすことができました。そしてちょうどこの頃から、国際化の波がすごい勢いで押し寄せてきました。研究室には次々に留学生が加わり、研究室のミーティングでも英語が使われるようになりました。さらに今度は自分たちが海外へ出て行かなくてはならなくなりました。その流れに便乗する形で、博士1年、2年の時は、ベトナムに行き、現地で実験コースを指導するという経験をさせていただきました。英語でコミュニケーションをとることへの抵抗がまだまだあり、さらに実験に不慣れな人たちに教えるには本当に大変でした。用意されているはずの材料や道具がないなんていうトラブルもありましたが、なんとか乗り越えることができ、今となっては楽しい思い出です。正直な所、研究室で自分の実験をしている方がい

いのにと何万回も思いながら洪々ベトナムに、しかも二回も行ったのですが、今になって思うと、とても貴重な経験をさせてもらえたと思っています。また、博士3年次には、スウェーデンに3カ月留学するチャンスをいただき、のんびりした生活、研究環境の中で、さまざまなことを学ぶことができました。



スウェーデン留学時の写真

博士修了後は、ポスドク期間を経て、助教の職に就くことができました。今は医療科学類の病理組織学実習などを担当させてもらっています。研究室にいて実験を指導することももちろん難しいのですが、大勢の学生さんを前に授業をし、実習の指導をすることはとても大変ですね。今になって、教えて下さっていた先生方のご苦勞がよく分かります。授業が早く終わらないかなと思いつつ聞いていたことを申し訳なく思うと同時に、そういう態度って前にいると分かるということを知り、驚きました(汗)。しかし私の場合は、すごく真剣な眼差しで聞かれていても、自分の未熟さを見透かされているのではないかとドギマギしてしまうのですが…。また医療科学類の学生さんたちと昨年の夏、今度は引率教員として三度目の訪越をしたことも、とても感慨深かったです。

実験ができるようになること(今でも自分ではできないこともたくさんあります)、実験を立案できるようになること(自分の知識不足、見通しの甘さを痛感することが多いです)、論文を書けるようになること(まだまだとても難しく時間がかかりすぎています)、研究費の申請書を書けるようになること(これはまた全然違うことで、とてもつらいです)学生を指導すること(教えることほど難しいことはないかと常々思っています)、授業をできるようにな



ベトナム短期留学コースへ医療科学類生の引率

ること(難しすぎて、自分の無力さが情けない日々です)と、このどれをとっても簡単なものはありません。それでも一つ一つ、少しずつ自分にできる範囲でやっていくしかないと思っています。その先に論文が通った、賞をもらった、研究費が獲れた、といったご褒美(研究費がないと研究ができないし、論文がないと研究費も獲れないので、ご褒美と言っている場合ではないのですが、敢えてそう言わせてもらいます)があるのだと思います。何も知らず、何もできなかった、入学当時の自分からは考えられない現在がここにあります。



日本病理学会学術奨励賞受賞時の写真

大学で教員として働くこと、常に新しい若者に出会い、また研究室では違う出身国の人たちと多くの時間を共にします。そういった環境の職場は他にはなかなかないと思います。在学生と一緒にいると、自分が大学生の頃はどうかだったかなと、昔の自分

を思い出すことが増えました。大抵は反省することばかりですが、それがまた自分の活力に繋がっている気がします。また研究室は留学生が多く、違った習慣や考え方を持つ人たちの集まりなので、大変なこともあります。自分とは違う考え方を知ることで、新たな発見があるのは面白いです。自分の好きな研究ができるということ以外で、この職について良かったと思ったことは、正直まだあまりなく、大変だと思ふことの方が多いです。でも、何かを学ぼうとしている人たちに囲まれた環境に身を置くことで、自分の成長にもつながると思います。教えることは決して一方通行ではなく、それを通じて、自分が学んでいるのだと気づかされる瞬間があります。大きな責任も伴いますが、やりがいを感じることもできる職業だと思います。

どんな経験も自分の糧になるとそう思えるようになったのは、本当に最近のことです。つらい状況でも、それを好転させるきっかけはあるのだと気づいたのも最近です。それは今か、明日か、何か月も、何年も先かは分かりません。その時が来たときに気付けるだけの感性を持っていたいなど思っています。嫌なこととか、面倒なこととか、色々ありますよね。それでも、今という時は今しかないので、せっかくだったら楽しんで、精一杯やった後には、違った景色が見えてくるだろう、そんな風に考えてみることにしました。研究者として、教育者として、自分に何ができるのか。自問の日々はこれからも続きます。

編集後記: 医療科学類の卒業生をリレー形式で追う本企画。第5回目は筑波大学 実験病理学研究室で助教として研究、教育に取り組む沖田さんをお願いしました。医療科学類卒業生のキャリアパスを知ってもらうことで、現役生が将来の進路選択を考える上でのよいきっかけになってくれれば幸いです。

制作: 桐枝会 (筑波大学 医療科学類同窓会) 医療科卒業生リレーエッセイ編集チーム



医療科卒業生リレーエッセイ

Copyright Medical Sci. Alumni Association, all right reserved